

〈巻頭インタビュー〉
三浦しをん

愛すべき 「辞書の人」

国語辞典の編集部を舞台に、
辞書編纂にまつわるさまざまな人間模様を描き、
2012年の本屋大賞第一位を獲得した『舟を編む』。
作者の三浦しをんさんが取材過程で見た、
『辞書編集』という仕事の
知られざる一面について伺いました。

えっ、今のジョーク？ っていうような冗談を、
すごくまじめな顔して言うんですよ…

親切だけど頑固そう

熱意があるのに押しが弱い

最初は職員室の人みたいだなって思いました（笑）。ちよつと先生っぽいんですけど、辞書の人って。居丈高いけだかに「教えてしんぜよう」という感じの先生では全然ないんですけど、でもすごくまじめで、授業中にポロツと、「えっ、今のジョークですか？」みたいなジョークを言うような、そんなタイプの先生というか。

わたしは普段、書籍や雑誌の編集者の方のおつきあいが多いんですけど、同じ文芸でも単行本と雑誌の編集者はちよつと毛色が違うし、さらに雑誌でも、文芸誌とファッション誌、週刊誌でも全然違って。

その中で比べてみると、辞書の編集者って、あんまり押し出しが強くないというか、静かな人が多いですよ。でも、頑固というか……（笑）。すごく色々と考えていて、観察している割に、あんまり自分から「これはこうで、こう」みたいなことはおっしゃらない。でもこちらが質問すると、「今のはジョークなの？」っていうようなジョークを織り交ぜ



つつ、親切に教えてください。すごく熱意があるのに、でも、その熱意をあまり表には出さない方たちだと感じました。

普通の人は異なる時間軸で
仕事をしている幸運な人々

小説の単行本の場合だと、連載が終わったから三年も五年も寝かせておらずに、「それじやあ年内に刊行しましょう」みたいなケースがほとんど。割と短いスパンで考えて、みんなそこに向かって動いていくわけなんですけど、辞書の編集っていうのはそれと違って長いスパンで、それこそ十年とかそういうスパンで考えているじゃないですか。しかも、一冊の本としてできあがった後も、それと同じくらいの時間をかけて改訂作業をしていく。だからなんですかね、せかせかしてないんですよ、辞書の編集者の方って。

それは多分、目の前のものがどれだけ売れたとか、どれだけ儲かったとか、そういうことばかり考えていたら、十年っていう期間保たないということの裏返しかも知れません。ひとつのことをコツコツと、そして気長にやり続けている結果、そういう人になっていくんでしょうね。そして、そのコツコツとした

作業の「継続」は、単に現在の編集者の作業だけにとどまらないわけです。辞書づくりには、先輩方から綿々と受け継がれてきたノウハウの蓄積があり、さらに次の世代の編集者にもそれを伝えていかななくてはいけない。そういうことを、みなさんすごく意識してらっしゃいましたから。そうしないと、この先の改訂作業もきちんと続かなくなり、時代の要請にも応えられなくなるっていうことを、すごく考えているんだと感じました。

でも、そういった浮世離れた時間軸で仕事をしていることを、一面的に「神聖視」するのは違うとも思っただすよね。たしかに辞書づくりは大変な仕事ですけど、彼らは苦しみながらも、それを楽しんでやっている

いうことも書かなくてはいけない。だって、こんなな気長な仕事にめぐり会えて、かつ、それを楽しんでやれる人って、すごく少数の幸運な人じゃないですか。しかも、サイクルの早い現代社会にあって、そのサイクルとなくべく疎遠でいられる、そういう意味でも希有な存在なわけですよ。

辞書の「中」と「外」をつなぐ存在が必要なんです

それとこの作品では、途中で辞書の編集部から宣伝部に異動する西岡という登場人物がいるんですけど、けっこう重要な役回りなんですよ。西岡というフィルターを通して、辞書を作る人々がけっして彼らだけで成り立っているわけではなく、西岡のように色々な葛藤を抱えながら彼らを支えている人たちとみんなと一緒に仕事をしているんだ、っていうことが伝えられるんじゃないかって。だって、世の中のほとんどの人は西岡の側にいるわけですからね。

辞書がどの人にとっても開かれた書物であ

るように、それを作っている人たちも、周囲と関わり合ってはじめて仕事になるんだとわたしは思います。その姿は「言葉のありよう」ということも一致すると思いますし、そのことを伝えるためには、西岡みたいな人物が必要になってきたんでしょうね。

辞書の人は無縁に思えるファッション誌での連載

『舟を編む』の連載にあたって光文社さんからは、「なんでも好きに書いていいですよ」と言われたんですけど、『CLASSY』*1という雑誌は私にはちょっとさびやか過ぎる（笑）。毎号届くたびに「ほほう、こうすれば結婚できるんだ」って熟読してたんですけど、結局、いまだに結婚できずじまい（笑）。まあ、それはいいとして、『CLASSY』の世界は私にとって初めて触れる文化でしたし、

逆に読者のみなさんは、辞書の世界こそまったくの異文化だと感じられたかもしれない。

でも、せっかくだから『CLASSY』の読者にも受け入れてほしい！ っていう思いもあり、色々と考えたんですよ。その結果、『舟を編む』には私的には恋愛要素をMAXに入れました（笑）。よく考えてみると、恋をするっていうのは異文化に触れる機会の最たるものですし、そういう異なる文化への理解ということを書こうと思えば、どうしたって「言葉」が必要になってきますからね。

そもそも異文化に触れるというのはひとつの喜びだと思うんですよ。そして、相手を知ろう、理解しようとするとき、人間はどうしても言葉を駆使しなければならぬ。ですから『舟を編む』の中でもそういった場面を、様々な形で書き込んでいこうと。

言葉のとらえ方に対して非凡なセンスを持つはずの馬締が、いざ自分の想いを伝えようとすると、なかなか上手く言葉が使えない。この矛盾に満ちた不器用さが、いかにも辞書の人らしいのかな、と。



舟を編む 三浦しをん著／光文社／1575円
大手出版社・玄武書房の営業部で変人扱いされていた馬締光也。ふとしたきっかけから言葉に対する非凡なセンスを見いだされ辞書編集部に異動となった馬締と、彼をとりまく個性豊かな登場人物たちが、新しい国語辞典「大波海」の編集に奔走していく。2012年本屋大賞第一位獲得作品。映画化も決定し来春公開予定。

*1:『CLASSY』(光文社)は20~30代の女性をターゲットとしたファッション誌。

すごく個人的で熱意がある人々ですが、 自分の身近にいたらちよつと嫌かも(笑)

なぜ辞書なのか
なぜ今だったのか

それこそ字が読めない子どもの頃から辞書がとても好きで、あの紙の質感や、めくる手触りを楽しんでいたのを覚えてるんですね。仕事をやるようになってからは、やっぱり国語辞典をよく使うようになったわけなんですけど、辞書って何となく、自動的にこういう風になつちりとした形になっているかのように思っていたんですよ。でも、あるとき思ったんです。「誰かが書かないことには、こうやってできあがるわけじゃないな」って。ということ、きつと誰かがこれだけの枚数を、しかもこのひとつの見出し語にはこれだけの分量で決めて作ってるんだって。で、それはちよつと驚愕の事実だなんて思ったんですよ(笑)。自分自身は小説を書くだけでひいひい言っているのに、こんなに分厚くて、かつ正確性も求められるものを……いたいどうやって編集するのかなあって。どんな人がどんな風に作っているのか知りたくなつて。それがきっかけなんですね。



それと、辞書づくりに関するノンフィクションや、辞書の編集者や監修者の自伝についてこう出ていて、それ読むとどれもすつこい面白くつて。みんなそれぞれ大変な逸話があったり、すごく個人的なんです。「どんな人が辞書を作ってるんだ」って思い始めてから、その手の本を趣味で読むようになって。そのうち、「ああ、これは小説になるな」って。辞書を作る過程に興味をもつてくたさつた方は、ぜひそういつたノンフィクションなどを探してお読みになっていただけるといいかなつて思います。実在の方々でとても面白い話がたくさん書いてありますから。

極めつけの辞書の人
諸橋轍次と大漢和辞典

大修館さんにも『大漢和辞典』*2つていうすごい辞書がありますけど、あれの序文や、

三浦しをん(みうら・しおん)
小説家。一九七六年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。二〇〇〇年「格闘する者」(草思社)でデビュー。二〇〇六年「まぼろ駅前多田便利軒」(文藝春秋)で直木賞受賞。『舟を編む』(光文社)で二〇一二年本屋大賞第一位を獲得した。

当時の社長さんのお書きになったあとがきを讀むと、確かにすごい方たちですけど、一方で、このお二人はすごくはた迷惑な人かも知れないつて(笑)。だつて社長さんなんて、息子さんに「大漢和のためにずつと会社にいる」つて。さらに、学校も辞めさせて「会社の経理をやれ」つて、すこすぎる! 身近にいたら絶対嫌でしょ(笑)。

じつは『舟を編む』の舞台を国語辞典にするか漢和辞典にするか迷つたんですよ。漢和辞典の編集部を舞台にして、諸橋先生を思わせるような人物と、その人生をなぞるような内容を書いたらすごく面白いだろうなあって思つたんですよ。だけど漢和辞典つて、国語辞典よりも更に特殊な世界じゃないですか。そこが小説の舞台としてはちよつと難しかったですよね。

でも、諸橋先生といえは、あれだけの業績を残しながらまったく偉ぶつたところがなかったというのが本場にすごい。少年時代から先生を知る人のコメントなどを見ても、先生の誠実で素朴な人柄がよく伝わってきます

*2:『大漢和辞典』(諸橋轍次[編]/大修館書店)は約5万語の漢字を収録する、世界最大級の漢和辞典。



★三浦しんさんオススメの
変わりダネ辞書

●アメリカ俗語辞典(研究社)

古いものなので現在の「俗語辞典」としてはあまり使えないんですが、「読み物」としてはすごく面白くて、なぜかSMの項目が爆笑の充実ぶり(笑)。いつもまじめそうな顔をしている辞書から、ふとした拍子に^あんな臭みみたいなものがすごく楽しい……そういうことを感じさせてくれた辞書のひとつですね。

●明鏡ことわざ成句使い方辞典
(大修館書店)

「誤用索引」っていうのが^か痒いところに手が届き過ぎてて笑っちゃいます。誤解とか誤用って、人の数ほどあると思うので、それを探すのもなかなか大変だと思うんですよ。ちなみに、小説の登場人物の設定で「この人ならこういうことわざ言いそうだな」とか、「こういうことわざ使ってほしいな」というのを探すのにも使っています。

●官能小説用語表現辞典(ちくま文庫)

ちょっと口にできないような項目について、実際の官能小説からものすごい数の用例を集めてあるんですが、その比喩表現の巧みさに本当に爆笑。官能小説というジャンルは、作品の評論を目にする機会が少ないですが、奥深い世界であることが伝わってきます。でも、実際にあれこれ比喩を考えながら夜のことをしている人はいないでしょうけど……。

●ヤクザ大辞典シリーズ(双葉社)

大辞典と言いながら、辞典形式では全然ない(笑)。読み物なんですけど、“大辞典”と銘打ってあるからには辞典です。ものすごく取材を重ねて、ヤクザ世界や歴代の親分に関して紹介しています。

●日本芸能人名事典(小学館)

伝統芸能だけでなく、あらゆるジャンルの芸能にかかわる人名が載っているのでも重宝しています。ご存命の方も多数載っているのですが、収録の基準については、「編集委員一同が二年間にわたって討議を重ね」たが、「刊行時点で追加しなければならぬ人物がすでに現れていることも事実である」そうです。終わりなき辞書編纂の道……。



し。多分その謙虚さがあつたからこそ、逆にあれだけの偉業を成し遂げられたのかな、と
思うんですよ。「俺の研究はこれだけすごいんだから、みんな付いてこいー」みたいな人

だったら、結局、誰も付いてこなくなつたんじゃないかなって。それに先生自身も、途中で気が遠くなるほどの長い年月、執意を激烈に
ういう意味で、やっぱり諸橋先生も辞書の人
に表明することなく、周囲の人に見守られながら静かにコツコツと作業を積み重ねた。そう
だったんでしょね。